

「政権と密着する東方正教会・・・ロシアとウクライナの確執」

塩尻和子

(アラブ調査室長、筑波大学名誉教授)

1. 東西教会分裂と正教会の成立

キリスト教はイエス論、つまり「三位一体論」の解釈によって宗派がカルケドン派と非カルケドン派に大きく分かれたのちも、幾度となく教会の分裂騒動に翻弄されてきた。西ローマ帝国が滅亡（476年）したことによって、カルケドン派の二大宗派、ローマに中心をおく西方教会、カトリックとコンスタンティノーブルに中心を据えるビザンツ教会とが対抗するようになった。

教会分裂によって、ビザンツ教会は政教一致の性格を持ち、皇帝が教会の教皇を兼ね、ギリシア文化を受け継いで瞑想的な傾向を有し、正教会（オーソドックス）と称した。

正教会の多くが、それぞれの地域の自立型の教会であるために、地域の政権と密着している。西暦610年のイスラームの発祥以降は、正教会は北方へ展開し、スラブ地方からモスクワへと広がっていった。今日では、正教会は主に中東、東欧、ロシアなどを中心とする自立型の教会となり、ギリシア正教会、ロシア正教会、ウクライナ正教会、グルジア正教会、ルーマニア正教会などと呼ばれ、それぞれ独自の民族色豊かな宗教儀礼を展開している。

ただし、正教会としての教義は統一されている。信徒はどの正教会でも会員となることができ、ミサに参加できる。

2. 混乱する正教会の現在

正教会（オーソドックス）は、一つの国に一つの教会組織をおくことを原則として、各地に存在する正教会の多くはそれぞれの地域の政権と密着した独自の儀礼を維持している。特に近年、ロシア正教会の政治的志向が注目される。

ウクライナの正教会は複数の教派が分裂していたが、2018年12月に3教会が統合して新たに「ウクライナ正教会」として発足した。この事態に対して、ウクライナ正教会の管轄権を主張していたロシア正教会のモスクワ総主教座はウクライナ正教会の独立に猛反発し、全面的な断交を宣言した。この事態は独立を承認したコンスタンティノーブル全地総主教座とロシア正教との間で大きな論争となり、NATO 対ロシアの代理戦争ともいわれた。これより4年前の2014年にはロシアによるクリミア併合も起きている。こうしてウクライナの人々の心に、反ロシア感情から激しい反ロシア正教感情も引きおこされた。

コンスタンティノープル全地総主教座は、全正教会の中心で総主教庁、あるいは全地総主教庁と呼ばれ、最高権威である。コンスタンティノープルは、現在のトルコ共和国最大の都市イスタンブールの旧名である。総主教座はイスタンブールの旧市街、金角湾に面したファナリ地区に建つ聖ゲオルギオス教会に置かれている。1カ国に1つの教会組織を具えることが原則である正教会には、カトリックのローマ教皇庁のような全体を統括する組織はないが、コンスタンティノープル総主教庁は歴史的経緯から正教会の代表格と認識されている。

3, 正教会は政治の道具なのか

正教会は一つの国に一つの組織のみ、という原則から、歴代の政権を支持する特色がある。今日のロシアにとっては近隣の国でも「同じ宗教」（ロシア正教）を信仰することが、「ルースキー・ミール」（ロシア世界）の確立に必要な条件だとされる。しかし、ウクライナは独自の文化と言語と宗教を主張する。

2022年2月に勃発したロシアによるウクライナ侵攻に関しては、正教徒の国々の盟主を自任するロシアには宗教的にも政治的にも我慢ならない背景があったようだ。しかし、ロシアによるウクライナ侵攻は、プーチンとロシア正教会のキリル総主教に対し、世界の正教会組織から抗議と批判が上がる事態となった。

4, 東欧・スラブ地域の正教会の略史

- ・キエフ大公国のウラジーミル大公が988年に東方正教を受け入れて以降、ロシア・東欧は正教が主流になる。
- ・オスマン帝国により1453年、コンスタンティノープルが陥落したことを受け、ロシア正教会は東方正教会の中心地を自認するようになり、周辺正教会の管轄権をも主張した。
- ・1589年、初代モスクワ総主教にヨブが就任（1589～1605年）。第3のローマの理念の実現したとされる。（第1のローマはイタリア、西ローマ帝国の首都ローマ、第2のローマはコンスタンティノープル、モスクワは第3のローマ）。
- ・1596年、ウクライナ西部に合同教会成立「ウクライナ東方カトリック教会」
- ・2つの大戦時、ソ連崩壊の流れの中で、ロシア正教会の勢力が拡大する。
- ・1922年 ソヴィエト社会主義共和国連邦成立
- ・1929年「反宗教的宣伝の自由を与える法」発布。
- ・1931年 救世主ハリストス（イエス）教会を爆破
- ・1929—39年 スターリンによる大粛清、集団化に反対したとして教会を迫害。

国内で5万堂以上の教会が閉鎖か破壊、

- ・1991年 ソ連邦が崩壊して、独立国家共同体に移行。
- ・2000年～2008年 プーチン大統領就任（～2022）
- ・2000年 ビザンチン・ハーモニー復活、救世主ハリストス教会再建。

- ・2000年以降、プーチン大統領時代に「モスクワは第3のローマ」が強調される。
- ・2022年 ロシアによるウクライナ侵攻。

ビザンチン・ハーモニーとは、国家と教会の関係のあり方を指す用語（正教会における神学・政治学上の基本的概念。国家と教会の両者を対立関係にあるものとしてではなく、いずれかが上位であるか、両者が同等なものであるかを問わないで、互いに立場を尊重・理解して支え合い、この世を来世の写しとするために共に歩むものとして位置づける。正教会において西方教会（カトリック）と異なる教会伝統、神学理解、歴史的経緯を経て形成された。

5. ウクライナ略史ーロシアとの複雑な関係

ウクライナでは、9世紀にはキエフ＝ルーシ公国が興り、10～11世紀にはヨーロッパの大国として君臨し、その後のロシア、ウクライナ、ベラルーシの基礎を形づくった。ウラジーミル大公の時代には、988年にキリスト教を国教として最盛期をむかえた。このキリスト教導入がロシア正教のはじまりとなり、1686年にはウクライナをモスクワ正教会の配下においた。

ウクライナは14世紀にはリトアニアの支配を受け、18世紀にロシア領となり、1917年にロシア革命によって中央議会が成立、18年にウクライナ人民共和国（1917年11月22日～1920年11月10日）として独立を宣言した。しかしロシアのヴォリシエヴィキ政権やポーランドの介入などで混乱し、22年にロシアのソヴィエト政権に続いてウクライナにも社会主義ソヴィエト政権が成立し、ソ連邦を構成する社会主義共和国となった。

1991年、ソ連から分離独立し、首都はキエフ（キーフ）となって今日に至るが、2014年からクリミア半島やウクライナ東部を巡りロシアと激しく対立している。2022年2月にロシアの軍事侵攻が始まり、今日、その東部は苦境に立たされている。

ウクライナの歴史は、常にロシアから支配や介入をうける歴史でもあった。もともとウクライナは東スラブの中心だったが、1240年からのモンゴルの侵攻などでキエフが衰退したのに対し、いわば分家筋のモスクワが台頭してスラブの中心となり、伝統的な「キエフ＝ルーシ」のルーシ（ロシア）の名前をモスクワ側に取りられてしまった。そのためキエフの人たちはウクライナという新しい名前を作らなければならなかったのである。

「ウクライナ」の語源は、ロシア支配時代から「小ロシア」という名称だとされているが、ウクライナ・ナショナリズムの高まった最近では、ウクライナという語は「地方」や「国」を意味する、という説が強くなっている。「ウクライナ」が特定の地域を示すようになったのは16世紀のことで、それはドニエプル両岸のコサック地帯を指しており、またコサックの指導者も「ウクライナ」を祖国と意識して、宣言や文書に使うようになったことから始まると言われている。

その後、歴史上ではキエフ＝ルーシ公国はウクライナ人の国というよりロシア発祥の国と理解されるようになり、ウクライナの歴史は「国がない」民族の歴史となり、常に「ロシア」の圧力に影響をうけていた。前述のように1922年にソ連邦を形成したが、実質的にはソ連の一部に埋没する形となった。この間、ウクライナ人の活動はロシア人と同一視され、ソ連の歴史として語られていった。

ようやくソ連邦が解体し、1991年にウクライナ共和国が独立国家となったが、多くの日本人にとってはロシアとウクライナの領土的な違い、政治・文化の違いなどははっきりとしていなかったにちがいない。2014年のロシアのクリミア併合も、身内の争いのようにとらえられていた。2022年2月24日のロシアのプーチンによってウクライナ侵攻が開始されると、世界にウクライナは民族主義画が堅固だと知らされ、ロシアとウクライナの違いをはっきりとさせ、ウクライナが一つの主権国家であることを認識させた。

ウクライナの歴史を概観すると、常にロシアや周辺の諸国にむさぼられる悲劇が続いている。これまでにウクライナはロシアとの間で3回戦争をしたが、いずれもウクライナの被害は大きかった。

北方戦争（1655年 - 1661年）、ロシア革命（ロシア革命の発生と同時に独立を目指してロシアと戦った）、大祖国戦争（第二次世界大戦でソ連がナチス・ドイツおよびその同盟国と戦った戦争に参加、前線に追いやられ、ロシアより多くの犠牲者をだした。）、現在の戦争を加えると、4回、戦ったことになる。

（中央学院大学の黒川知文先生による）

6. 正教会と政教一致・・・ウクライナ侵攻の要因

「正教会」は自立型の教会であり独自の民族色豊かで神秘的な宗教儀礼を持つ。ロシアもウクライナも多民族、多宗教の世俗国家で、その中の正教会の役割は国家に協力するものとなった。各地の正教会は、民衆の精神的な支柱になっているので、人心掌握のために必要だと考えられるが、国と国との利害の一致にも大きくかかわってくる。

正教会のシステムはもともと政教一致（ビザンツ皇帝が総主教という伝統）であった。今日のロシア正教では、プーチンとキリル総主教が協力して、ソ連崩壊後の宗教界の混乱に乗じて勢力を伸ばしている。前述のように、ウクライナの正教会もまた、最近になっていきなり一体化して、政治に近づいた。ウクライナの正教会は複数の教派が分裂していたが、2018年12月に3教会が統合して新たに「ウクライナ正教会」として発足した。これに対抗して、ウクライナ正教会の管轄権を主張していたロシア正教会のモスクワ総主教座はウクライナ正教会の独立に猛反発し、全面的な断交を宣言した。

ウクライナ紛争に先立つ2018年、正教会同士の対立がみられた。ロシア正教会がコンスタンティノープル総主教庁との関係を一部停止したのである。ロシア正教会が管轄権を主張するウクライナ正教会の独立をコンスタンティノープル総主教庁が承認することを決め

たためであるが、その前の 2014 年のロシアのクリミア併合もその対立の要因の一つになっている。

10 世紀末に、キエフ＝ルーシ公国のウラジーミル大公の時代にキリスト教を国教としたことから、ロシア正教の歴史が始まり、その後、ロシア・東欧一帯は正教会を奉じることになったという東方正教会の歴史とロシア正教会の立ち位置を考えると、ウクライナ正教会の独立は、ロシアにとっては、譲れないことであった。オスマン帝国によりコンスタンティノーブルが陥落したことを受け、ロシア正教会は東方正教会の中心地を自認するようになり、周辺正教会の管轄権をも主張するに至ったからである。

現在のモスクワ正教会のキリル総主教は、プーチン大統領とはサンクト・ペテルブルク出身、また KGB のスパイであったという経歴などが共通するためか、大統領の精神的盟友であることを公に表明している。しかも彼らは「ルースキー・ミール」（ロシアの世界）という価値観でも一致している。

「ルースキー・ミール」とは、現在のロシア政府をロシアのキリスト教文明の守護者と見なす世界観であり、政治的・領土的・宗教的なロシアの拡大という野心を共有し、プーチン大統領とキリル総主教の思想が一致している。その実現を目指すためにプーチン大統領が「政治的」にキリル総主教が「精神的」に取り組んでいると言われている。これは、旧ソ連やそれ以前のロシア帝国の領土はロシアの正当な勢力圏であるとする考え方である。

キリル総主教は、プーチン大統領のウクライナへの軍事侵攻について「対立の起源は西側諸国とロシアの関係にある。NATO が約束を守らず、ロシアとの国境に近づき、軍備を増強してきた。さらに、西側はウクライナの人たちを再教育してロシアの敵に作り変えようとした」として軍事侵攻に理解を示す声明を発表した。プーチン大統領は、最も重要なのは「ロシアの人々が、同じ言葉を話し、ロシア正教会を信仰していること」と主張し、「ロシア民族の一体感」とロシアのアイデンティティを守る戦いという意識を表明している。

7, 日本の正教会 (<https://www.orthodox.japan.jp/h-n.html>)

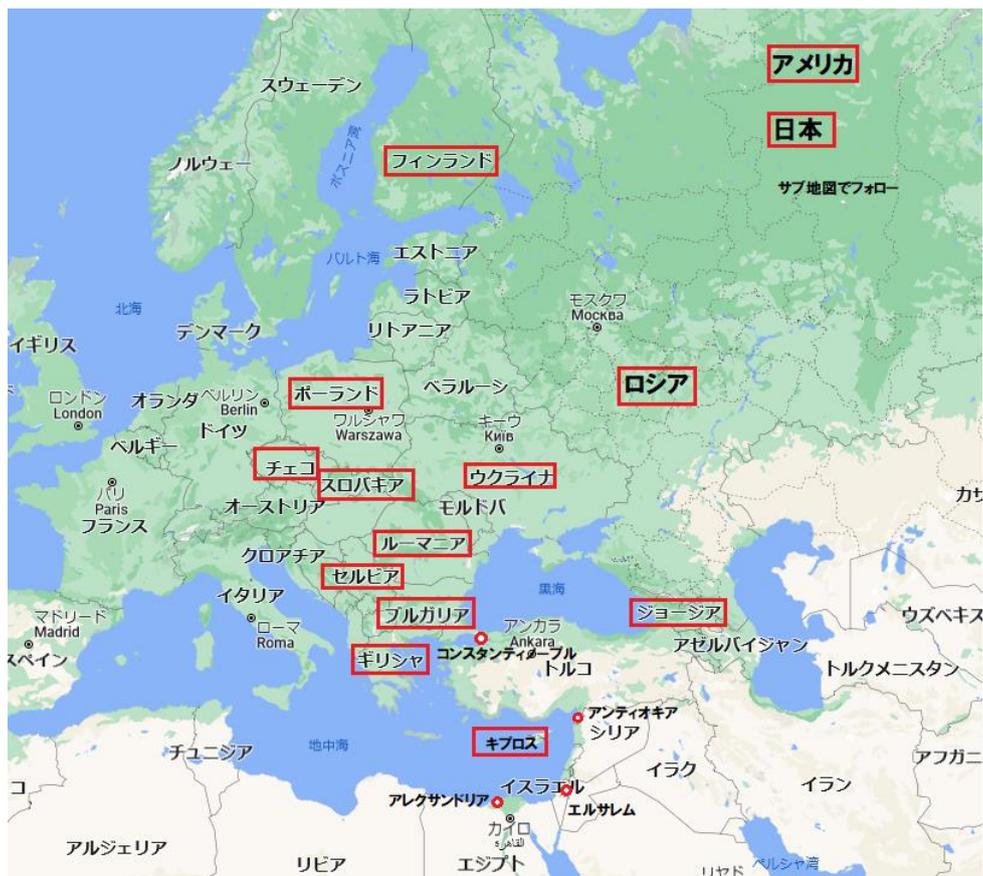
わが国ではロシア人の宣教師ニコライによって創始された日本ハリストス正教会（日本正教会）がある。1891 年に東京復活大聖堂（ニコライ堂）が建設されているが、国家や政権との関係はなく民族色も薄く、独立した教会として活動をしている。

正教会の中には、各地で政治と社会から独立した教会もある。日本正教会（ハリストス正教会はその一例である。そういう意味では、日本正教会は自治正教会という地位にある。

戦後、日本正教会はロシア革命以来共産主義政権下に閉じこめられていたモスクワ総主教庁との事実上の断絶関係の中で、日本教会とは姉妹関係にある在アメリカ・ロシア正教会（「メトロポリア」）から主教を迎えた。そして 1970（昭和 45）年、米ソの冷戦の緩和に伴い対話がよみがえり、「メトロポリア」がロシア正教会から独立して「独立教会」（アフトケファリア）となるのに伴い、日本正教会もモスクワ総主教の祝福を受け「自治教会」（アフトノモス）となった。自治教会とは完全な独立とはいえないものの経済的には独立し、日々

の教会運営を独自に行うという形である。

どの正教会でも、世界中で宗教教義は同じであるとされ、信者はどの地域の教会にも所属し、礼拝に参加することができる。ただし、注意をしなければならないのは、「東方正教会」といっても、カルケドン決定を容認する正教会とは別に、おもに中東地域で活躍する正教会の中には、カルケドン信条の三位一体論を認めない非カルケドン派の正教会も存在する。コプト正教会、エチオピア正教会、シリア正教会、アルメニア使徒教会などである。



独立正教会の国の色分け、総主教庁の図示、アメリカ正教会と日本正教会は文字情報のみ

参考：カルケドン決定（西暦451年の公会議）で決定された三位一体論

三位「父・子・聖霊」のうち、論争的となるのは「父と子」の関係であるが、人間イエスに神性を付与したことによって、キリスト教はユダヤ教から明確に独立すると共に、「カルケドン信条」を受け入れるか否かによって、新生のキリスト教の内部でも、大きな分裂が引き起こされるようになった。公認派は父と子は同質であり、キリストの本性は神であり、神とキリストは同格であるとして両方の性質を認める。カトリック、正教、ほとんどのプロテスタントが承認している。

（本稿は2022年10月22日にNHK文化センター埼玉教室で発表されたテキストである。）